

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ

野田塚・野田遺跡

二〇〇三年三月二日

三重県埋蔵文化財センター

2003. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

本書で報告する野田塚・野田遺跡の現地調査を行った平成13年の夏は、記録的な猛暑に見舞われました。この猛暑は同時に、全国的な渇水状況を生み出し、各地に深刻な影響を与えました。高度の文明社会が進展した現代でもなお、自然の前に我々人間がいかに無力であるのかを思い知らされる瞬間もあります。我々日本人は、世界的には少数派とされる多神教の民族と言われます。古来、人々は周囲のあらゆるものに神の存在を認め、信仰の対象としましたが、その多くは自然に対するものでした。即ち、自然に生活を大きく左右された祖先たちは、自然に対する畏怖・畏敬の念を常に抱き、生きてまいりました。その一端は、発掘調査の際にもしばしば垣間見ることができます。それは、死者や自然に対する祭祀遺構や祭祀遺物という形となって我々の眼前に現れ、そこに残された先人からのメッセージには、現代に生きる我々に対し、多くの教訓が残されていると言えましょう。

調査の契機となった宮川用水の沿線地域は、古来農地が高位にあるため、宮川を間に控ながら、その水を灌漑用水として十分に利用できず、天水や溜め池などに頼っていました。宮川用水の完成により、この地域は安定的な水源が確保されました。完成から30年余の年月が経過し、農業を取り巻く環境の変化による用水不足や、施設の老朽化により、地域の営農活動に深刻な影響がでてきております。これを受け、宮川用水第二期土地改良事業が行われることになりました。

宮川用水第二期土地改良事業地内には、多数の埋蔵文化財が遺存していることが確認されています。これらは一度破壊されてしまうと二度と復元できません。しかし、その一方で土地改良事業も急務となっており、三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と土地改良事業との調和を図るために、農林水産省等関係機関と協議を重ねてまいりました。その結果、工法や設計の変更により、できる限り遺跡の保存を行い、やむを得ず工事によって保存できないものについては、当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、記録保存することになりました。

今回報告するのは、多気郡明和町に所在する野田塚・野田遺跡の発掘調査記録であります。本書が、消滅した遺跡に代わって、郷土の歴史・文化を未来に伝える一助となれば幸いと存じます。

なお、末筆ながら、発掘調査事業の推進にあたり、ひとたなならぬご理解とご協力をいただいた農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所並びに、社団法人中部建設協会、明和町教育委員会をはじめとする関係機関各位及び、発掘作業に従事していただいた地元の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

1. 本書は、三重県多気郡明和町池村字野田に所在する野田塚・野田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に係る発掘調査は、平成13年度国営宮川用水第二期土地改良事業に伴い、三重県教育委員会が農林水産省東海農政局から受託して実施したものである。現地調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、農林水産省東海農政局の全額負担による。
3. 調査は、下記の体制により実施した。
 - ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター
 - 所長 桂川 哲
 - 副参事 山澤義貴
 - 調査第二課 主幹兼課長 新田 洋
 - 主査兼第三係長 森川常厚
 - 第三係主事 五嶋史佳 小山憲一
 - 業務補助員 北川ゆき 中島沙恵 中村敬子
 - 廣田洋子 山路艶子
 - ・土工担当 社団法人中部建設協会
4. 本書の執筆・編集は、小山憲一が行った。また、本書に掲載した写真的撮影、遺構・遺物図面の作成は、調査担当者のほか、業務補助員が行った。
5. 本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第VI系に属している。挿図の方位は、すべて座標北で示している。なお、当地域の磁北は、6度20分西偏する（平成3年現在）。
6. 本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
S F : 焼土坑 S D : 溝状遺構
7. 本書に使用した事業計画図及び地形図は、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所の提供による。その他国土交通省国土地理院発行の地形図を使用した。
8. 本書では、土層及び遺物の色調について小山・竹原編『新版標準土色帖』（9版1989）を使用した。
9. 本書で報告した各遺跡の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文 目 次

I 前 言	1
II 位置と環境	4
III 野 田 塚	6
1 遺 構	6
2 遺 物	10
3 結 語	11
IV 野 田 遺 跡	13
1 遺 構	13
2 遺 物	13
3 結 語	13

挿 図 目 次

第 1 図 斎宮調整池開発事業予定範囲	3
第 2 図 遺跡位置図	5
第 3 図 遺跡地形図	7
第 4 図 調査区周辺事前測量図	7
第 5 図 野田塚調査区平面図	8
第 6 図 野田塚土層断面図	8
第 7 図 野田塚遺構配置図	9
第 8 図 野田塚 S F 1 実測図・埋土土層断面図	10
第 9 図 野田塚盛土除去後基底面	10
第 10 図 野田塚出土遺物実測図	11
第 11 図 野田遺跡遺構平面図	14
第 12 図 野田遺跡調査区北壁・東壁土層断面図	14
第 13 図 野田遺跡出土遺物実測図	15
第 14 図 野田遺跡推定範囲	15

表 目 次

第 1 表 野田塚出土遺物観察表	11
第 2 表 野田遺跡出土遺物観察表	15

写 真 目 次

調査前風景	16
野田塚調査風景	16
野田塚調査区遠景	17
野田塚調査区全景	17・18
野田塚 S F 1 完掘状況	18
野田塚盛土土層断面	19
野田塚盛土除去後基底面 燃土・炭化物検出状況	20
野田遺跡調査風景	20
野田遺跡調査区全景	21
野田塚出土遺物	22
野田遺跡出土遺物	22

I 前 言

1 調査に至る経緯

当事業の全体についての調査に至る経緯や保護協議、調査体制等については、既刊の「発掘調査報告Ⅰ」に詳述しているため、ここでは省略する。詳細については前掲書を参照されたい。また、当事業に伴う平成13年度の調査全般の概要については、既刊の「発掘調査概報Ⅲ」を参照されたい。

今回調査対象となった野田塚・野田遺跡は、斎宮調整池の拡張造成に伴う残土処理場予定地に所在する。当該の事業計画は、斎宮調整池に隣接する丘陵部の谷筋に、残土を恒久盛土として処理するというものである。三重県埋蔵文化財センターでは、平成11年3月16日付けで「埋蔵文化財取扱い三重県埋蔵文化財センター基準」（以下「センター基準」と略表記）を策定しており、埋蔵文化財包蔵地に対する恒久的な盛土・埋土は「現地表面から概ね3mを超える場合」には発掘調査が必要と定めている。当該事業は「センター基準」を超える計画となっていたため、今回の調査は、この基準に基づき実施した。

野田塚・野田遺跡は、分布調査の段階では中世以降の「塚」と想定していたが、古墳密集地帯の丘陵縁辺部に立地することから、古墳の可能性も全否定せず範囲確認調査を実施した。平成13年5月30日～6月1日に行った調査の結果、隆起部分の外周には周溝は巡らないが、隆起部分は自然地形ではなく、人為的な盛土であり、中～近世の遺物も出土したことから、隆起部分を中心に90m²の調査区を設定し、本調査を実施することとなった。

2 調査の経過

(1) 調査経過の概要

事業計画は、基本的に事業予定地の用地買収を行わず、当該地所在の水田上に残土を盛土し、計画水準まで嵩上げした後、元の耕地に整備して地権者に返却するというものである。調査区は丘陵端の山林のため、用地買収の対象となる可能性はあるが、調査時は民有地の借地対応となるため、借地範囲や立木の伐採等について地権者と現地立会いを行い、調

査の着手に必要な環境整備を図った。

現地調査は、立木伐採などの事前準備終了後の平成13年6月19日に着手した。調査期間中は、時折激しい雷雨に見舞われることもあったが、全般に好天に恵まれ、調査は順調に進行した。しかしながら、盛夏の折は記録的な猛暑となり、高齢者中心の作業員の安全衛生に一層の配慮が必要であった。また、全国的に渇水状況となるなど、一時期、降雨量が極端に減少したことから、極度に乾燥した遺構等の保全に必要な散水にも多大な労力を費やした。

調査の結果、近世築造と判明した塚は、盜掘されているためその性格は不詳であるが、方形プランの盛土の裾部に葺石を巡らせており、焼土坑も1基検出した。また、範囲確認調査時に、盛土下部に土坑状の落ち込みを確認していたため、塚に伴う土壙墓の可能性を想定して調査を行ったが、結果的には塚には伴わない、平安時代の後半期とみられる溝状遺構が確認された。従って、今回の調査遺跡は塚を野田塚と命名し、下層の溝状遺構は今回調査区の南方で確認している野田遺跡の北側縁辺部と判断した。なお、この溝状遺構は、調査区東側の赤道に延長することが判明したため、調査区を拡張し、調査面積は最終的に100m²となった。ただし、この溝状遺構は、拡張部のさらに東側に延長していることが判明したが、当該範囲に着手する環境が整わなかつたため、同年9月5日に調査の全工程を終了した。

(2) 調査日誌（抄）

- 6月19日 土層観察用セクションベルトの設置。
表土除去開始。
- 6月26日 表土・崩落土中から中～近世陶器片複数出土。
- 6月28日 北～西裾で葺石を検出。
- 7月3日 野田塚築造状況復元完了。
- 7月4日 実測用ポイント設置。葺石実測。
(7月12日完了)
- 7月11日 復元後地形測量。
- 7月12日 復元後調査区全景写真撮影。
主体部の掘削開始。

- 7月19日 主体部全高の1/2 堀削完了。埋納等の遺構は検出できず。盛土中から古墳時代～近世の土器片、陶器片が出土。
- 7月23日 セクションⅡ・Ⅳのみの堀削に方針転換。
- 7月30日 セクションⅣ完掘。盛土底部に溝状遺構検出。
- 7月31日 北・東のセクションベルト土層断面写真撮影、断面実測。
- 8月1日 セクションⅡ完掘。断面観察から、盜掘坑を確認。
- 8月2日 西・南のセクションベルト土層断面写真撮影、断面実測。
- 8月3日 セクションⅠ・Ⅲの堀削。東セクションベルト上で焼土坑（S.F.1）を検出。
- 8月6日 S.F.1埋土層断面実測。セクションⅠ完掘。セクションベルトの撤去開始。
- 8月8日 S.F.1写真撮影。実測。
- 8月9日 盛土完掘。
- 8月16日 野田遺跡・溝状遺構（S.D.1）を検出。調査区東側の遺構延長範囲を確定。
- 8月17日 S.D.1堀削開始。土器片・須恵器・ロクロ土器等が出土。
- 8月30日 S.D.1完掘。調査区北壁土層断面実測。
- 9月4日 調査区全景写真撮影。調査区東壁土層断面実測。
- 9月5日 遺構実測完了。調査終了。

3 調査の方法

(1) 地区設定について

範囲確認調査の際に、概ね方位に添うように設定した十字トレチ及びセクションベルトを基準として、2m方眼の地区杭を設置した。従って、この2m方眼は、国土座標軸とは合致していない。地区杭には、北～南に数字、西～東にアルファベットを付与し、各地区の北西杭を当該地区名とした。

(2) 堀削の方法

すべて人力で行った。野田塚については、セクションベルトを基準に、北西をⅠ、南西をⅡ、南東をⅢ、北東をⅣと設定し、4セクションに分割して堀削を行った。

(3) 遺構図面の作成について

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下のとおりである。

- ・事前測量図…1:100
- ・遺構平面図（全図）…1:100
- ・遺構平面図／断面図（個別）…1:10
- ・土層断面図…1:20

(4) 遺構写真について

調査区全景の撮影は、野田塚については高所作業車を、野田遺跡についてはローリングタワーを利用した。フィルムは、6×7cm版（モノクロ、カラーボジ）に加え、35mm版（モノクロ、カラーボジ、カラーネガ）を使用した。使用したカメラは、アサヒペンタックス6×7、ニコンF M2である。

4 問題点と今後の課題

今回の調査を通じ、公共事業とそれに伴う埋蔵文化財調査のあり方や、その取り扱いについて、以下のような問題点と課題が残された。

近年の社会情勢として、国、或いは地方レベルにおいても公共事業の見直し論議が活発化しており、全国的に事業規模や実施の可否が不透明となる傾向にある。

本事業は、基本的に老朽化した幹線水路の改修と、用水不足の解消を目的とした斎宮調整池の拡張造成であるが、ここ数年の動向として、斎宮調整池の造成事業が流動化し、事業自体の実施の可否や設計の変更など、不確定要素が多分にあった。現に、平成11年度に実施した斎宮池16号墳の調査では、事業の見直し作業が行われたため、途上で調査が凍結され、事業計画地の設計変更が検討されている。今回調査の契機となった歴史処理場についても、斎宮調整池の動向次第で大きな影響を受けることに加え、前述のような営農水田を埋め立てる計画に対する地元住民との調整に事業者側が苦慮しており、これに連動する埋蔵文化財調査が受けける影響も大きい。

斎宮調整池やそれに伴う歴史処理場予定地には、多数の調査対象遺跡が所在し、事業が開始されれば短期に調査量が増大するため、限られた人員配置の中で、可能な限り調査量の平準化を図るために今回の調査に着手した。しかし、調査終了後に地元調整

の結果から事業計画地が再検討され、設計変更の方向で事業が進行しており、今回調査区が事業地外となる可能性も否めない。

現在の社会情勢の下では、民間の開発行為も含め、今回のような事象の増加が予想される。発掘調査そのものが一種の破壊行為となる以上、一層の慎重な対応が必要であるが、事業の進捗に歩調を合わせざるを得ない現状と、限られた人員で調査体制を整備

することとの整合性をいかに保つか、課題が残る。

【註】

- ① 小山憲一・筒井正明『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 外山遺跡・片落C遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）
- ② 小山憲一・五嶋史佳『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）
- ③ 小山憲一・瀬野亮知世『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）



第1図 斎宮調整池関連事業予定範囲（当初計画、1：10,000）

II 位置と環境

1 位置

野田塚・野田遺跡（1）は、南伊勢の海岸平野上に位置する玉城丘陵中央部の、独立小丘陵南側縁辺部に立地する。行政上の所在地は、三重県多気郡明和町池村である。遺跡立地の玉城丘陵は、全般に小さい谷が樹枝状に入り組んだ、標高30～100m程度の比較的起伏の小さい丘陵である。当丘陵の縁辺部は台地もしくは段丘となり、現在も生活の場として多くの集落が形成され、当遺跡と同一丘陵の東側縁辺部や、谷を挟んだ東側の低位丘陵にも土着の集落が営まれている。玉城丘陵の北東部及び北部・西部には、それぞれ明野台地と、櫛田川及び、かつては櫛田川の本流であったとされる支流の祓川によって形成された沖積平野が広がっている。

2 環境

当遺跡が所在する多気郡は、7世紀には伊勢神宮^①の神領となっていた。郡内の有爾郷鳥墓には、伊勢神宮の庶務一般を管掌する神庫が置かれ、神政が執り行われていた。この神庫は、現明和町養村所在の鳥墓神社周辺に推定され、鳥墓遺跡（2）として遺跡指定されている。また、天武天皇二年（673年）に大来皇女が卜定されてから制度的に確立したと考えられている斎宮もこの地に置かれ、南北朝期の廃絶まで、斎王を中心とした華やかな宫廷生活が営まれた。斎宮制度確立以前のいわゆる伝承上の斎王の時代の様相は不明であるが、当該期のこの地域の特筆すべきこととして、斎宮周辺の丘陵上や台地上に無数に分布する、中期から後期にかけての古墳群の存在が挙げられ、斎宮成立の基盤となったと考えられている。野田塚・野田遺跡の周辺にも古墳は密集しており、同一丘陵上には愛場古墳群（3）が所在し、東方の丘陵には世古古墳群（4）、戸峯古墳群（5）などが所在する。また、5世紀後半代の帆立貝式前方後円墳を含む高塚古墳群（6）、大塚古墳群（7）、神前山古墳群（8）や、後期初頭とみられる前方後円墳を含む中山古墳群（9）、斎宮池古墳群（10）、ユブミ古墳群（11）などが周辺の丘陵

上に築造されている。その他、特に列挙はしないが、周囲の丘陵頂部や尾根筋の大部分に古墳が築かれている。

かつて神政が執り行われたとされる有爾郷鳥墓の神房推定地には、現在、神官御料土器調製所が所在し、伊勢神宮へ調進土器を貢納している。この地域は神代の昔、高天が原から埴土を移したとされる伝承地となっており、古代より土器製作の原料となる良質な粘土が採取できたようである。付近に所在する北野遺跡（12）や堀田遺跡（13）、水池土器製作遺跡（14）、戸峯遺跡（15）、発シA遺跡（16）、発シB遺跡（17）などでは、飛鳥～奈良時代に土師器を大量に生産していたことが発掘調査により確認されており、それを裏付けている。生産された土師器は、交易によって尾張や美濃などの遠隔地にも供給されていた可能性も指摘されているが、主に伊勢神宮や斎宮での祭祀や日用品として使用されたとみられる。平安時代以降、この地域の土師器生産に関する考古学的資料は乏しいが、古代以来中世～近世においても神宮への土器調進を行っていたことが、文献史学を中心して検証されている。^②また、中世以降は伊勢神宮への「奉仕」^③的生産から、商品土器の生産へと発展し、いわゆる「南伊勢系土師器」の中心的生産地として土器生産が続けられた。

平安時代に栄華を誇った斎宮も、中世には衰退の一途を辿り、南北朝期に廃絶する。これ以後、この地域を支配下に治めたのは伊勢国司北畠氏であった。北畠氏の拠点の一つとなった田丸城（18）をはじめ、配下の池村城跡（19）、岩内城跡（20）、有爾中城跡（21）、笠木氏館跡（22）などの中世城館が付近に現存しており、往時の勢力が偲ばれる。また、平安時代～中世にかけて、これら領主層を底辺で支えていたであろう集落跡が、当遺跡周辺でも確認されている。上ノ山遺跡（23）では平安時代中期の掘立柱建物が、堀田遺跡、仲垣内遺跡（24）、赤垣内遺跡（25）では、後期の掘立柱建物や井戸が検出された。西村遺跡（26）や愛場遺跡（27）、大道A遺跡（28）では、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物や井



第2図 遺跡位置図(1:50,000)【この地図は、国土地理院発行の2万5千分1地形図(松阪・明野・国東山・伊勢)を掲載したものである。】

戸、土坑、溝などが確認されている。さらに、楠ノ木遺跡（29）や蚊山遺跡（30）では、平安時代末期～室町時代にかけて大規模な集落が形成され、蚊山遺跡では江戸時代に瓦窯も営まれた。

江戸時代に入ると、「おかげ参り」と称される庶民階層の伊勢参宮が隆盛を極め、各地から大挙して[註]

- ① 「皇太神宮儀式帳」（『群書類從』一輯神祇部）
『日本書紀』（『新訂増補國史大系』第一巻下）
- ② 「皇太神宮儀式帳」（『群書類從』一輯神祇部）
- ③ 「明和町遺跡地図」（明和町、1988年）
- ④ 「日本書紀」（『新訂増補國史大系』第一巻下）
- ⑤ 「倭姫命世紀」（『續群書類從』卷第三 第一輯上 神祇部）
- ⑥ 城ヶ谷和広「東海地方における古代の土器生産と流通（予察）」（『古代の土器生産と焼成遺構』窯跡研究会編、真陽社、1996年）
- ⑦ 小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態—伊勢国有東制を素材として—」（『研究紀要』第1号、三重県埋蔵文化センター、1992年）
- ⑧ 伊藤裕伸「南伊勢系土器の展開と中世土器工人」（『研究紀要』第1号、三重県埋蔵文化財センター、1992年）
- 小林秀「外山遺跡」（『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第一分冊』三重県埋蔵文化財センター、1990年）

伊勢神宮を目指した。神宮周辺は、当時多くの参詣者で賑わい、その繁栄ぶりは文献等に多数記録されている。参宮街道筋にあたるこの地域にも、伊勢参宮にまつわる悲喜こもごもの記録が残されており、今なお人々の崇敬を集める神宮所縁の地には、随所に往時を偲ばせる佇まいが残されている。

伊藤裕伸「中世伊勢系の土器器に関する一試論」

（『Mie history』vol.1、三重歴史文化研究会、1990年）

- ⑨ 上村安生「上ノ山遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター、1992年）

伊藤久嗣・伊勢野久好「X 多気郡明和町坂田遺跡」

（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1981年）

小玉道明「度会郡玉城町仲坂内遺跡」・「度会郡玉城町赤坂内遺跡」（『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会・三重県文化財連盟、1979年）

- ⑩ 高見宜男「M 多気郡明和町西村遺跡・愛場遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983年）

中野教夫「大道遺跡」（『三重県埋蔵文化財年報16』三重県教育委員会、1986年）

- ⑪ 大西素行「第二編第一章第四節 歴史時代」（『玉城町史上巻』玉城町、1995年）

III 野田塚

当遺跡は、玉城丘陵北端部の独立小丘陵南側縁辺部に立地する。調査区の現況は山林である。調査は、第5図の範囲（約90m²）で行った。

層序は、主体部については概ね表土直下で人為盛土に達する。盛土は、十数層に渡って薄く丹念に積み上げられたと考えられる。裾部では、2～3層の堆積層下で人為盛土もしくは明黄褐色砂質土の地山、あるいは後述する野田遺跡の溝埋土上面に達する。

1 遺構

盛土 平面形は一辺5～6mの不整形を呈し、南辺が崩れた形状を呈する。検出面と塚頂部の比高差は約1.5mである。調査の途上で、戦前に盜掘を受けたとする地元住民からの証言を得ていたが、調査の結果、盜掘坑の明確な掘形は確認できなかつたものの、土層観察より塚頂部～南辺に大きな搅乱坑が認められ、現代の廃棄物も埋没していた。これらは前述の証言を裏付けるものであり、また、盜掘坑は

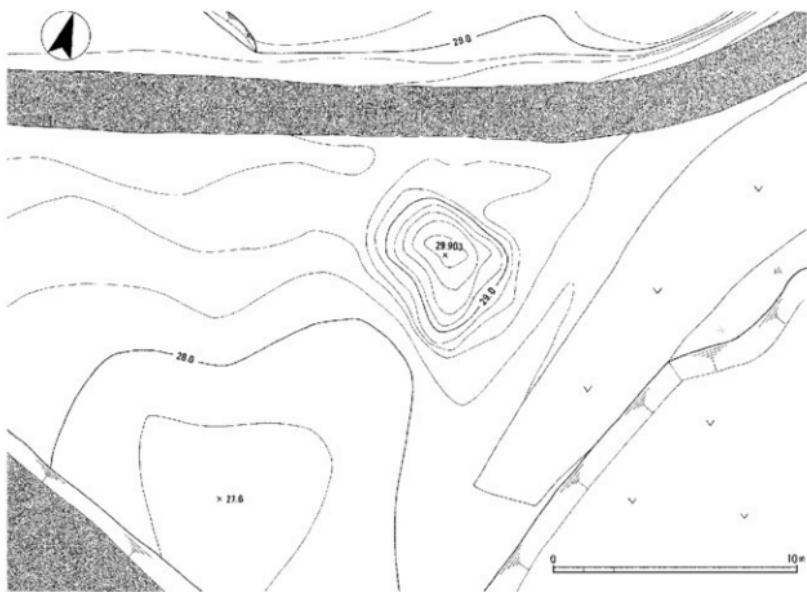
検出した遺構は盛土及び、その裾部に葺かれた葺石、焼土坑（S F 1）である。後述するが、盗掘されているため埋納遺構は検出できなかった。遺物は、古墳時代～近世の土器類、須恵器、陶磁器等、整理箱で3箱ほど出土しているが、遺構に伴うものは皆無に等しく、大半は塚盛土の混入遺物である。従つて、この塚の造営時期は近世と考えられる。

埋め戻されていることも判明した。従つて、埋納遺構は検出できなかつたが、もとより埋納遺構が築造当初に存在していたか否かも不明と言わざるを得ない。また、南辺の形状が崩れているのは、盜掘の際の破壊に起因するもので、当初は方形プランを意識して築造されたと考えられる。

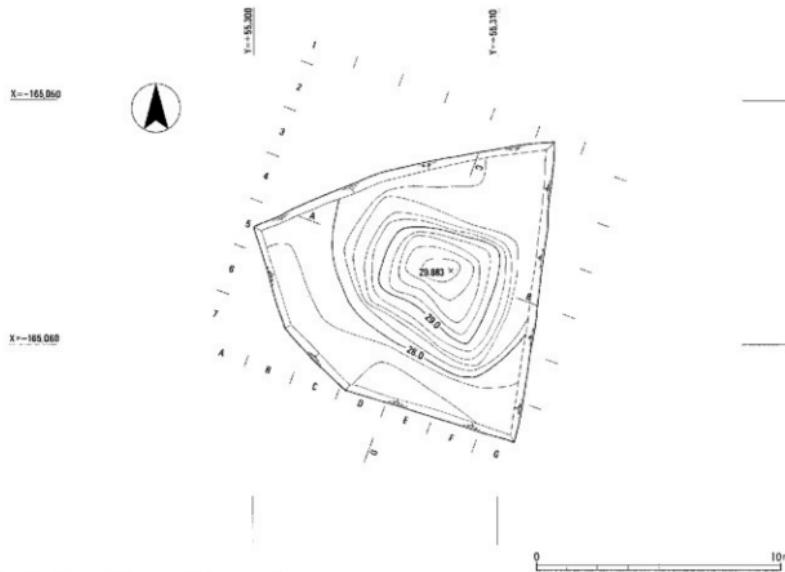
盛土は十数層に渡って薄く丹念に積み上げられており、しかも砂質～粘質の異なる土質の土が使用



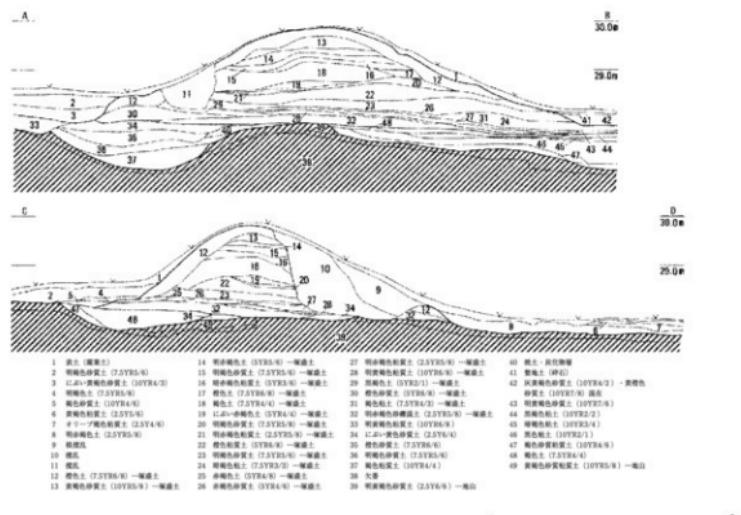
第3図 遺跡地形図(1:10,000)



第4図 調査区周辺事前測量図(1:200)



第5図 野田塚調査区平面図(1:200)



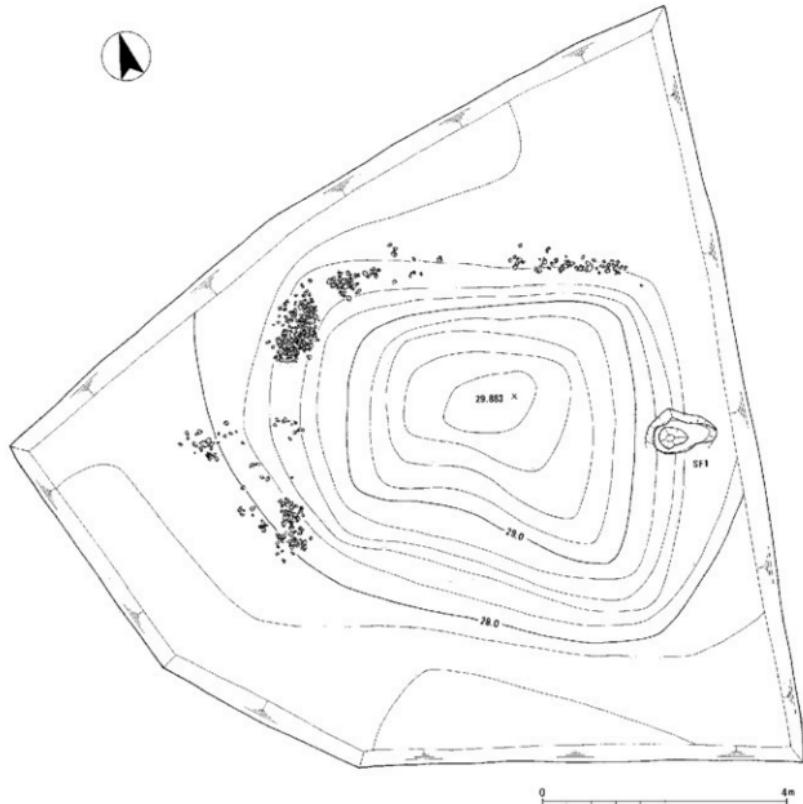
第6図 野田塚土層断面図(1:100)

されている。方形プランに加え、比較的急傾斜の形状を呈することが、前述のような築造方法が採られた理由と思われる。

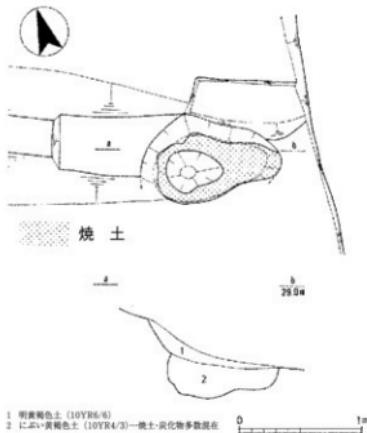
葺石 使用された石は、概ね拳大の山石である。検出範囲は、塚の北辺と西辺の裾部である。土層観察用のトレンチや樹木の切り株等の影響で、一部欠損しているが、北西隅の遺存状態が特に良好であった。築造当初、塚の全面に葺石が施されていた可能性も想定されたが、大幅な破壊行為を受けていないことに加え、調査区内で前述の範囲以外に同様の集石や崩落石が認められなかったことから、築造当初から裾部のみに葺石を施したと考えられる。また、南辺

と東辺には葺石が認められなかつたが、南辺は前述の通り、大きな盃掘坑が掘削されているため、その際に破壊された可能性も考えられる。一方、東辺は赤道に隣接しているため、往来等の影響で石が散逸したか、あるいは後述するSF1の構築や、その場の燃焼作業等の影響で散逸した可能性も考えられる。従って、裾部に葺石を巡らせていたことは、想定としては成り立つであろう。

SF1 土層観察用のセクションベルトに重複していたことから、ベルトの撤去までその存在に気付かず、撤去作業中に団らすも一部を破壊してしまった。東辺の裾部に位置し、表土直下の塚盛土の上面から



第7図 野田塚遺構配置図(1:80)



第8図 野田塚SF1実測図・埋土土層断面図(1:40)

掘り立めている。平面形態は、長径約1.2m、短径推定約1mの不整椭円形を呈すると考えられる。底部と側壁は、被熱により固く焼け締まり、赤色に変色していた。埋土は黄褐色系の2層で、2層目の埋土中には、焼土粒や炭化木片が多数混在していた。土器等の時期判断の材料となる遺物が全く出土していないため、塚築造後の近世以降と言ふ他ない。

この焼土坑が塚に伴うものか否か、さらにはその燃焼目的など、推定しうる判断材料を今回の調査では得られなかつたため、不明と言わざるを得ない。ただし、被熱の状況から繰り返し燃焼作業が行われ



第9図 野田塚盛土除去後基底面(1:200)

たことは確かである。燃焼自体が目的であった可能性も考えられるが、「何か」を燃焼させることが目的であった場合、土坑の規模も比較的小規模であるため、燃料材の充填スペースも考慮すると、さほど大きなものは燃焼していなかつたと考えられる。

基底面 盛土をすべて除去し、基底面を露出させた結果、時期の異なる野田遺跡の溝状遺構を検出したものの、当初想定していた野田塚に伴う遺構は検出できなかつた。しかしながら、やや西寄りの基底面において、炭化物を包含した焼土痕跡を1m×3m程の範囲で検出した。

2 遺

図化できた遺物は7点である。以下、遺物の概要を記すが、詳細は遺物観察表を参照されたい。

(1) は、土師器壺である。小片のため、口径は不明である。端部を摘み上げ、外面に面を形成し、^①内面がやや肥厚する。飛鳥時代の遺物と考えられる。

(2) は、土師器の小皿である。口径9cm、器高1.5cmで、口縁端部のみヨコナデされる。平安時代末期の所産である。

(3) は、口径18cm程度の無釉陶器鉢である。口縁端部は外反し、内面が水平になる。内面全体に煤

物

が多量に付着している。

(4) は、残存部僅少のため全体の器形は判別し難いが、常滑窯の片口小壺と考えられる。9cmとした底部径も推定であるが、体部の残存端部が若干内湾しているため、器形を片口小壺と推定した。15世紀前後の遺物であろう。

(5) は、陶器の壺または壺か。残存部僅少のため、器形は特定し難い。暗灰黄色を呈し、内面には自然釉が認められる。

(6) は、陶器土瓶の底部片とみられる。上げ底

が著しく、底部にドーム状の空間が形成される。淡黄色の素地に、緑色の釉が内面に施されている。伊賀産であろうか。近世の遺物と思われる。

(7) は、磁器碗である。灰白の素地に、青緑色

の釉が内外面に施され、器面は光沢を放つ。半球形の底部に付与された高台の内面にまで施釉が及んでいる。時期は近代にまで降るか。

3 結 語

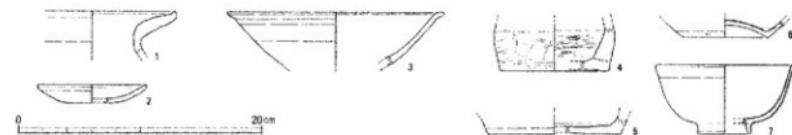
今回の調査では、盗掘を受けていることもあり、造営目的などの核心部分について、ほとんど資料を得ることはできなかった。また、付近に在住の土地所有者もその由来を認知しておらず、伝承等も不明である。ここでは、限定的ではあるが、調査で得られた資料をもとに若干の考察を行い、結語をしたい。

まず、今回の調査成果を整理すると、得られた資料は以下の通りとなる。

- ・出土遺物が僅少で、出土状況からも時期判断に窮するものの、塚の造営時期は近世と考えられる。
- ・平面形態は、一辺5~6mの方形を呈し、基底面

からの比高差は約1.5mである。

- ・盛土は十数層に渡って薄く丹念に積み上げられており、しかも異なった土質の土が使用されている。
- ・盗掘を受けており、埋納遺構及び埋納遺物の存否は不明である。
- ・外部施設として、北裾及び西裾に葺石が施されており、四辻ともに巡らせていたか否かは不明であるが、葺かれた範囲は裾部に限定されていたと考えられる。
- ・東側裾部に位置する焼土坑は、検出状況から繰り返し燃焼行為が行われていたと考えられる。



第10図 野田塚出土遺物実測図(1:4)

番号	実測 番号	器 種	遺構	出土部	法 量 (m)			調整技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存	備 考
					口径	器高	その他						
1	001-07	土師器 壺	—	5C 盛土 混入	—	—	—	内:江幡基ヨコナダ、基盤ナダ 外:江幡基ヨコナダ	粗 3mm以下の 砂粒含	良	明黄褐 10YR6/6 小片	口縁部	
					9.0	1.5	—	内:江幡基ヨコナダ、基盤ナダ 外:江幡基ヨコナダ、基盤ナダ	やや粗 2mm以下の 砂粒含	やや 不良	にぬけ焼 10YR7/4 1/3	口縁部	
2	001-06	土師器 盆	—	4 F 盛土 混入	—	—	—	内:江幡基ヨコナダ 外:江幡基ヨコナダ	密 0.5mm以下 の砂粒含	やや 不良	内:黒褐 2.5Y3/1 外:灰黄 2.5Y7/2 1/4	口縁部 内面全面に煤付着	
					18.0	—	—	内:江幡基ヨコナダ 外:江幡基ヨコナダ	—	—	—	—	
3	001-03	陶器 鉢	—	E 盛土 混入	—	—	—	内:江幡基ヨコナダ 外:江幡基ヨコナダ	—	—	—	—	
					7 C 盛土 混入 (確定)	—	—	底部径 9.0 底部径 9.0 (確定)	内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	やや密 2mm以下の 砂粒含	良	内:灰褐 7.5YR5/2 外:灰褐 2.5YR5/3 1/6	底部 常滑窯
4	001-02	陶器 片口小壺	—	底部径 9.0 (確定)	—	—	—	内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	内:灰褐 7.5YR5/2 外:灰褐 2.5YR5/3 1/6	底部	
					11.0	—	—	底部径 11.0 内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	内:灰褐 2.5Y5/2 底部 内面に自然釉付着 1/6	底部	
5	001-04	陶器 壺又は壺	—	E シナ	—	—	—	内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	内:灰褐 2.5Y5/2 底部 内面に自然釉付着 1/6	底部	
					7.0	—	—	内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	内:灰褐 2.5Y5/2 底部 内面に自然釉付着 1/6	底部	
6	001-01	陶器 土瓶	—	3 E 盛土 上層	—	—	—	内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	素地:灰青 2.5Y8/3 釉:青緑 土色刷に該当なし 1/2	底部	
					11.0	5.7	—	高台径 4.2 内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	素地:灰白 7.5Y8/1 釉:青緑 土色刷に該当なし 1/4	口縁部	
7	001-05	陶器 碗	—	6 D 盛土 上層	—	—	—	内:江幡基ナダ 外:江幡基ナダ	—	—	—	—	

第1表 野田塚出土遺物観察表

・基底面に炭化物を包含した焼土痕跡が認められる。塚は過去の調査例から、内・外施設を具備しない、単に盛土のみから構成され、規模も径10m程度、高さ2m内外、形状は円形または方形が一般的とされる。このような塚の有り様をもとに野田塚を鑑みた場合、やや小規模ではあるが、形態的にはごく一般的なものである。しかしながら、北～西裾に施された葺石は、塚の外部施設と認識でき、特筆すべきものとして挙げられる。葺石は裾部のみに施されているが、その目的としてまず考えられるのは、機能的な側面である。即ち、比較的急傾斜の形状を呈する盛土の崩落防止や、方形の形状を維持する土留めとしての役割を担っていると考えられる。裾部のみに巡るという点では、古墳に見る外護列石に類似すると言えようか。また、古墳のそれが、他の隣接する地域との区画も意図していることから、野田塚の葺石も同様の目的があった可能性は否めない。盛土の構築状況については、先述したように、土質の異なる土を十数層丹念に積み上げており、古墳築造の際に採用された版築的な構築方法を探っていると考えられる。以上のように、小規模ながら比較的多くの労力を割いており、丁寧な築造姿勢が窺える。

基底面で確認した焼土痕跡については、野田塚に伴う遺構と断定し得ないが、同様の類例が過去の調査で認められており、塚造営に伴う祭祀行為の痕跡の可能性がある。

造営目的については、前述のようにほとんど資料が得られなかつたため不明であるが、各地の調査や研究から示された塚の造営目的は、概ね以下のように大別されている。

1 経典保持を目的とした経塚

2 墳墓としての塚

3 行政上の指標である一里塚や藩境塚、村境塚などの境界を区切る塚

4 民俗信仰に基づいた塚

塚は内外施設を具備しない、単に盛土のみから構成されているものが一般的とされており、従って、造営目的や造営年代の不明なものが多い。また、上記のように造営目的が大別されているが、1～3の目的で造営されたものに民俗信仰が結びつき、多種

多様の性格を帯びることも稀ではないようである。野田塚の場合、造営目的は不明であるが、得られた資料の範囲内で以下のように考えてみたい。

今回の調査で検出した裾部に巡らせた葺石は、土留めという機能的な目的以外に、他の隣接する地域との区画も意図していたと仮定すれば、塚の聖域化を目的としていたとも考えられる。また、東裾で検出した焼土坑が冢に伴うものと仮定すれば、繰り返し燃焼行為が行われていることから、何らかの祭祀行為が行われていたと想定するのは飛躍に過ぎるであろうか。しかし、そう仮定すれば、野田塚は神聖な場所として造営され、祭祀が行われた一種の「祭りの場」であったとも考えられる。野田塚は、独立丘陵の東側縁辺部に所在する土着集落の外れに位置し、南方には丘陵地帯が控える。また、塚の北西には前述の集落の墓地が所在し、野田塚はその墓参の経路上に以前からあったようである。これらの立地条件も、野田塚造営の目的を解明する手掛かりとなるかもしれない。多分に根拠の薄い推測ではあるが、ある種の民俗信仰に基づいた性格を有するものであるという可能性は示しておきたい。

〔註〕

- ① 上村安生「伊勢・伊賀における古代土器類煮沸具の様相」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年）
- ② 「斎宮の土器部」（『斎宮跡調査事務所年報』斎宮跡調査事務所、1984年）
- ③ 赤羽一郎『常滑燒－中世窯の様相－』（考古学ライブラリー23、ニュー・サイエンス社、1984年）
- ④ 野村幸希「中近世塚の調査・研究の現状」（『月刊考古学ジャーナル3』No274、1987年）

〔参考文献〕

- ・ 板詠秀一「『塚』の考古学的調査・研究」（『月刊考古学ジャーナル3』No274、1987年）
- ・ 平野榮次「塚の信仰」（『月刊考古学ジャーナル3』No274、1987年）
- ・ 野村幸希「中近世塚の調査・研究の現状」（『月刊考古学ジャーナル3』No274、1987年）

IV 野田遺跡

野田遺跡は、野田塚の下部に位置する。遺構の延長に伴い、調査区を一部拡張したため、調査範囲は第11図の範囲（約100m²）となった。

層序は、野田塚の盛土部分を除くと、表土直下もしくは2～3層の堆積層下で検出面に達する。検出面のレベルは標高28m前後である。

検出した遺構は、溝状遺構（S D 1）のみである。遺物は、概ね平安時代～鎌倉時代の土師器、ロクロ土師器、山茶碗等が出土しているが、整理箱で2箱ほどの出土量で、遺存状態も芳しくないものばかりであった。

1 遺 構

S D 1 平面形態は、検出の範囲では「く」字状に屈曲し、それぞれ調査区の北と東に延長する。溝の底部は、西半は南西から北東方向へ、東半は北西から南東方向に向かってそれぞれ徐々に深度を増しており、屈曲部の底部には高低差が生じている。埋土は概ね3～4層の粘質土から成り、調査区北壁付近の底部では炭化物が混在していた。また、調査区を拡張した東端部では、底部に土坑状の落ち込みが2

基認められ、南側の落ち込みの埋土には炭化物や焼土粒の混入が認められた。出土遺物が限られているため、大まかな時期判断となるが、平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構と考えられる。他に検出できた遺構は無く、遺構の形態も不規則なため、性格は不明であるが、周辺の地形から自然の落ち込みとは考えにくく、人為的に掘削されたものと判断したため、溝状遺構と報告した。

2 遺 物

図化できたのは、4点のみである。以下、掲載遺物の概要を述べるが、詳細は遺物観察表を参照されたい。

(1)は、土師器杯である。口径は約12cmで、緩やかに外傾した口縁部は、端部のみにヨコナデが施される。平安時代後1期所属の遺物と考えられる。

(2)は、土師器皿である。口径9cm、器高1.5cmで、口縁端部のみヨコナデされる。また、ヨコナデの下端部がやや肥厚する。平安時代末期の遺物で

ある。

(3)は、ロクロ土師器碗である。底部に高台は付随せず、やや上げ底となり、糸切り痕跡が明瞭に残されている。平安時代末期の遺物か。

(4)は無釉陶器鉢である。口縁部は内寄味気に立ち上がるが、端部はやや外側に屈曲する。また、端部は断面三角形状となり、外面に面が形成される。内面には自然釉の付着が認められる。

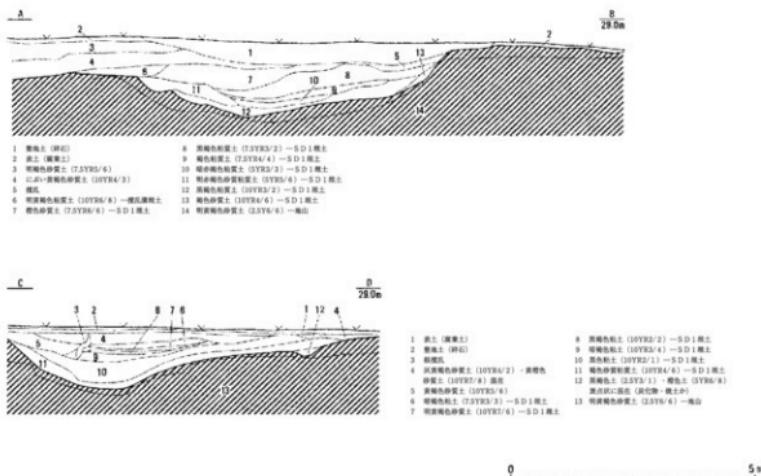
3 結 語

今回の調査では、塚に伴う土壙墓という当初の想定に反し、平安時代末期～鎌倉時代初頭の溝状遺構を確認するに至った。前述の通り、遺構の形態は不規則な不整形を呈しており、かつ、他の遺構も検出できなかったため、遺構の性格は不明と言わざるを得ない。また、遺構の全容についても、北側と東側

の調査区外に延伸しているため不明であるが、北側については丘陵の斜面に向かうため、程なく終息に向かうと考えられる。一方の東側については、調査区を拡張してもなお延伸しているが、畑地に削平された部分までには終息或いは途絶すると考えられる。遺構の広がりとしては、今回調査区の南方が有力と

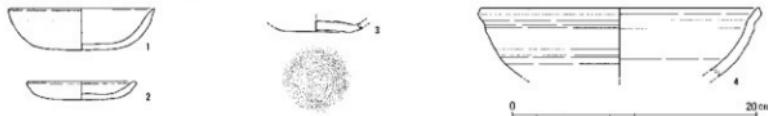


第11図 野田遺跡遺構平面図(1:200)



第12図 野田遺跡調査区北壁・東壁土層断面図(1:100)

考えられ、判断材料は乏しいものの、一章でも記した通り、今回調査区は、南方で確認している野田遺跡の北側縁辺部と判断し、遺跡範囲を第14図のようにな想定した。当遺跡付近には、鎌倉～室町時代の集落跡が確認された西村遺跡や愛場遺跡、弥生～鎌倉時代と考えられる樋口遺跡が所在していることから、当遺跡との関係も想定されよう。



第13図 野田遺跡出土遺物実測図(1:4)

番号	実 番 号	器 種	遺構	出土場	法 量(cm)			調整技術の特徴	胎 土	焼成	色 調	残存	備 考
					口径	高さ	その他						
1	001-04	土師器 杯	SD1 SD1 直上7m	4 G SD1 直上7m	12.0	3.4	—	内凹輪郭部ヨコナギ、底基ナギ 外凹輪郭部ヨコナギ、底基ナギ 表面の壊滅著しく調査不可題 1mm±10mm	やや密 不良	赤 明赤 極 2.5YR5/6	1/2		
2	001-02	土師器 盆	SD1 SD1 直上7m	5 C SD1 直上7m	9.0	1.5	—	内凹輪郭部ヨコナギ、底基ナギ 外凹輪郭部ヨコナギ、底基ナギ 表面の壊滅著しく調査不可題 1mm±10mm	やや粗 不良	白 白 極 10YR7/4	口縁部 1/4		
3	001-01	ロクロ土師器 袖	SD1 SD1 直上7m	—	—	底部粗	5.6	内凹ロクロナギ 外凹ロクロナギ、底基ホリ未調 0.5mm±10mm	密 良	淡 黄 2.5Y8/3	先 有	底部 赤 切り痕跡明瞭	
4	001-03	陶器 脇	SD1 SD1 直上7m	4 G SD1 直上7m	23.0	—	—	内凹ロクロナギ 外凹ロクロナギ 0.5mm±10mm	密 良	灰 黄 2.5Y7/2	1/6	口縁部 内面自然釉付着	

第2表 野田遺跡出土遺物観察表



第14図 野田遺跡推定範囲(1:10,000)

【註】

- ① 「斎宮の土師器」(「斎宮跡調査事務所年報」斎宮跡調査事務所、1984年)
- ② 前掲註①
- ③ 前掲註①
- ④ 高見宣男「M 多気郡明和町西村遺跡・愛場遺跡」(「昭和57年度農業基盤整備事業地地域理文化財発掘調査報告」三重県教育委員会、1983年)
- ⑤ 「明和町遺跡地図」(明和町、1988年)

図版 1



調査前風景(南から)



野田塚調査風景(西から)



野田塚調査区遠景(南東から)



野田塚調査区全景(東から)

図版 3



野田塚調査区全景(西から)



野田塚 S F 1 完掘状況(東から)



野田塚盛土土層断面(北東から)



野田塚盛土土層断面(南西から)

図版 5



野田塚盛土除去後基底面 焼土・炭化物検出状況(南西から)



野田遺跡調査風景(南西から)



野田遺跡調査区全景(南西から)

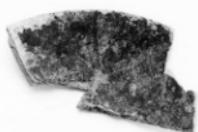


野田遺跡調査区全景(西から)

図版 7



3



3



4



6

野田塚出土遺物(1:3)



1



3



4

野田遺跡出土遺物(1:3)

報告書抄録

ふりがな	のだづか のだいせき						
書名	野田塚・野田遺跡						
副書名	宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ						
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	208-4						
編著者名	小山憲一						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732						
発行年月日	西暦 2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
の 田 塚	みえけん なき ぐん 三重県多気郡 めいわちく いわらあざ 明和町池村字	24442 新発見	34° 30' 38"	136° 36' 10"	20010619 ~20010809	90m ²	国営宮川用 水第二期土 地改良事業
の だ い せき 野田遺跡	の だ 野田	24442 新発見			20010816 ~20010905	100m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
野田塚	塚	近世	盛土・葺石・焼土坑	土師器・中近世陶磁器			
野田遺跡	集落跡	平安時代末期	溝状遺構	土師器・ロクロ土師器			

三重県埋蔵文化財調査報告 208-4

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ

野田塚・野田遺跡

2003年3月

編集 発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 有限会社 北尾印刷
